



## 年間第 32 主日 (ルカ 20:27-38)

神の喜びにあずかる生き方を私たちは選ぶ

年間第 32 主日 C 年の福音朗読は、復活を否定するサドカイ派の人々との問答です。わたしたちキリスト者にとって復活の信仰はなくてはならないものですが、当時のユダヤ人にとっては、復活を信じる決定的な出来事を持ち合わせていませんでした。復活したイエスをよりどころとするわたしたちとは違っていただけです。

今週の説教、なかなか切り口が見つかりませんで、以前の説教を過去 15 年分合計 5 つ読みました。その中でも出色の出来だったのは田平に赴任してすぐのものでした。上五島に出張することも頭にちらついてうまくまとまりませんでしたので、今年は三年前のをそっくり使いたいと思います。

田平に赴任したその年の文化の日に、福岡の大神学院で行われた神学院祭に子どもたちを 8 人連れて行きました。広島教区の新しい司教様、白浜司教様が、召命の実りのために神学院のグラウンドで野外ミサを司式してくださいました。司教様は説教の中で自分が神学校に入るきっかけとなった出来事をお話してくださいましたが、その時の説教は今も鮮やかに思い浮かぶほど心を揺さぶられる説教でした。

白浜司教様は中学 2 年から長崎の小神学校に編入しました。町村合併前の新魚目町の小学校を卒業した時、神学校への憧れはあったものの神学校に行かないかと勧めてくれる人は誰もいなかったそうです。中学校は地元の中学校に進み、バレー部で部活動をしていましたが、同級生の中にただ一人、部活動を断った友達がいたそうです。

中学校に入ったら部活動で汗を流すのが当たり前と考えていた白浜少年は、なぜ彼が部活に入らないのか知りたくて、部活が休みだった学校帰りに、彼の家を訪ねました。すると彼は、学校から帰るとすぐに家で飼っていた山羊を放牧から連れ帰り、薪で風呂を沸かし、炊飯器でご飯を炊いて共働きの両親の帰りを待っていました。しかもその作業を一日も欠かさず、毎日続けていると言うのです。

ところが同級生は、高熱にうなされる病気になってしまいました。上五島では治療できる病院がなかったもので、本土に運ばれましたが、懸命の看病も報われず、13 歳でこの世を去ってしまいました。白浜少年はいのちのはかなさに衝撃を受け、同級生の分も生きるため、そして後悔しない生き方をするため、中学 2 年生から神学校に編入したそうです。

白浜司教様は説教中何度も声を詰まらせていました。その様子にわたしは思わずもらい泣きしたのです。わたしは白浜司教様の中学 1 年生の時の同級生のことを思うのです。彼はどうなるのだろうか。もし本朗読された福音書のサドカイ派の人々が考えるように、復活などないと言うのなら、彼が黙々と果たした両親を助ける奉仕は誰が報いてくれるのでしょうか。

わたしは、13 歳で亡くなった白浜司教様の同級生も含め、善人も悪

人もいっしょくたになってどこかに置かれているとはとても思えません。神が十分に報いてくださり、復活して、喜びの宴でいつまでも神とともに住む。そういう姿を信じたいです。白浜司教様は、自分が道をそれないために、あの同級生は天国からいつもわたしを見守っていてくれると信じている。そう言いました。きっとそうなのだと思います。

もちろん、当時のユダヤ人の疑問にはきちんと答えなければなりません。サドカイ派の人々が持ち出した難問は、復活後の人間の姿を、今の姿を物差しにして考えたために誤解していたのです。

この世にあって人が自分の名を残していくためには、子孫が与えられなければなりません。そのため、子孫を残さず家系を絶やしてしまうことは決して認められなかった。そこで今回のような問題が起こってしまいました。

「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」(20・34-36) 次の世では、家系を土台にした人間関係ではなくなり、神とわたしの関係が何より大切にされる状態に移されるのです。

このことを決定的に明らかになさったのはイエス・キリストです。復活についての問題は、人類に先だって最初に復活されたイエス・キリストの啓示を待つほかはなく、イエス・キリストに耳を傾ける以外に答えを見つけることはできないのです。アブラハム、イサク、ヤコブやモーセも、復活されたイエス・キリストが生かしてくださるのです。

わたしたちの復活の信仰を持っています。この信仰を人に自信をもって語るために、わたしたちにはよりどころがあるでしょうか。身近な司祭・修道者は復活の信仰を人に語るよりどころになると思います。

司祭・修道者はこの世に名を残しません。それでいいのか？と問われるなら、「次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない」と答えることができます。今この世にあってすでに、復活にあずかる者として生きている人なのです。司祭・修道者は復活を信じて生きる信仰者のよりどころだと思います。

もしわたしたちキリスト者の復活が夢物語だとしたら、名を残さない司祭・修道者はこの世でいちばんみじめな生き方です。しかし事實は違います。復活はイエスが約束してくださった、わたしたちの希望のみなもとです。この世に死んで、神のいのちに生きるキリスト者の生き方は、必ず報われる生き方となりました。わたしたちはもっと力強く、証しする必要があると思います。

復活を信じるわたしたちは、本当の意味で生きている生き方を選びました。この選びは自分のためだけではありません。「滅びるいのちに生きるのではなく、復活して永遠に神の喜びにあずかる生き方を選んでみませんか。」今週わたしたちが持ち帰り、伝えるべき言葉です。